

いつも喜べ。

絶えず祈れ。

すべてのことにおいて感謝せよ。

これこそ、神があなたがたに望んでおられることである。(テサロニケ5 : 16 ~ 18より)

Rejoice always. Pray without ceasing.

In everything give thanks, for this is the will of God .

喜び、祈り、感謝、この三つは、キリスト者の心のあるべき状態を示している。

もちろん、神を信じていなくとも、さまざまの喜びもあり、感謝もするだろう。しかし、その喜びや感謝は一時的であり、自分になにかよいことがあったときだけ喜び、感謝したりする傾向が強い。

現代の若い世代のように、小さいころから過保護に育ち、有り余る食べ物やゲームや遊具などにあふれて育ってきた者たちは、深い感謝の心は大きく欠落してきていると言えよう。感謝とは、よきものを受けたという実感がなかったら湧いてこない。食事や衣服、住居その他の持ち物すべて、あるいは人間関係で親や学校の先生、友人たちが何かをしてくれていても、当然と思っている場合には感謝はない。

身の回りの自然にしても、初々しい若葉や草花、青空や夜空の星などを見ても、それらが自然にあるとしか思えない場合には、その美しさや新鮮さに感動はすることはあっても、感謝という気持はない。

しかし、私たちを創造され、またすべての自然や出来事も、深いところで全能の神がなさっている、しかも愛の神が真実をこめてなされていることなのだ、と信じる心があるときには、そうした身近な若葉や野草、青空といった身近なものひとつひとつが、神の私たちへの愛の現れなのだと感じ、受け取ることができるから、そこにも感動だけでなく、感謝が生じる。

感謝の心は喜びと直接に結びついている。不満や怒り、悩みは喜びと反対であるが、それは当然感謝などとてもできない心の状態である。

そうした、喜びと感謝という重要なことを生み出し、支えているのが、祈りである。祈りとは絶えざる神との結びつきであり、霊的な交流である。祈りの心があるときには、たしかに周囲のさまざまのものが自分に与えられたのだ、と感じる。祈りのない心は、それらが当たり前として感謝は生じない。

パウロがここに引用した文のすぐあとに、「(聖なる) 霊の火を消さないように」と記しているのは、絶えざる祈りの心とは、その人の魂のうちに神からの見えざる霊の火がいつも燃えていることにほかならないからである。

私たちも絶えず神と結びつき、祈りによって内に与えられている聖なる霊が消えないようにしていきたいと思う。

野草と樹木たち



シュンラン（春蘭）

徳島県小松島市 日峰山

2009.3.27

春に咲く蘭の仲間、昔から親しまれているのがこのシュンランです。蘭の仲間は、現在では、野生のものはなかなか身近にはありませんが、万葉集にもよまれている野草のネジバナは、今日でも折々に草むら、芝生のようなところに自生して、それが多くのひとにとっておそらく最も身近なラン科の花だと言えます。

私が小さいころは、シュンランは、わが家のある山にはあちこちにたくさん見られたのですが、次第になくなってしまい、現在ではめったに見つからないものです。

それが、今年わが家の近くの山の斜面に今までは咲いたことがなかったのに、このような花を咲かせているのが見つかったのです。花茎の高さは10～20cm程度で、淡黄緑色の花をひとつつけています。黄緑色の花というのは一般的には少なく、葉の色と似ているので、地味な自然の味わいがあり、花の咲き方や暗緑色の細い葉など全体として見るものに語りかけ、心を安らかにするような親しみを感じさせる山の花です。

この花の素朴なおもむきも、神の創造によるのであり、神のお心の一端を映していると感じます。なお、この花びらや、花の茎も食べられるものですし、鉢植えなどにして昔から愛好されてきました。こうした素朴なよさを持つ野草の花が今後も生き延びて、見るものの心に静かなるメッセージを送り続けますようにと願っています。

（写真、文ともにT.YOSHIMURA）